

ベトナム火山洞窟調査プロジェクトへご協賛のお願い

謹啓 時下ますますご清栄のこととお慶び申し上げます。

この度は突然のお願いを書面にて差し上げます失礼をお許し下さい。

私達は、富士山及び海外の火山洞窟に関連する学術調査・研究・普及・啓蒙等の事業を通じて火山防災の知識等を社会に還元し、火山洞窟学及び関連する自然科学の進歩に寄与することを目的に、1970年、東京大学名誉教授・津屋弘達博士によって創立しました火山洞窟研究団体であります。

本プロジェクトは、2007年にベトナム・ダクノン省中部高原で発見された貴重な溶岩洞窟の調査であります。当学会は2007年より2回の現地探索と2012年4月の予備調査を行い、ベトナムに眠っていた世界的規模の巨大溶岩洞窟群と幻の火山噴火口を確認しています。

ご存知とは思いますが、ベトナムは石灰洞窟（鍾乳洞）が多く存在し、一部の洞窟は観光資源として開発、観光公開がされています。調査の対象となる溶岩洞窟周辺は、景勝地に隣接しているだけでなく、広大な火山や噴火口、溶岩台地等の火山跡など学術的にも貴重な地域です。

2013年4月18日、VIETJO ベトナムニュースにおいて、「隣接するベトナム東南部ドンナイ省で、ドイツの洞窟探検クラブとベトナム熱帯生物学研究所の合同調査隊は東南アジア最長の溶岩洞窟を発見した」と報じましたが、私達（日本隊）はベトナム・ドイツ合同調査隊とは異なる地域となります。

本プロジェクトは、通算4回目となる2013年12月末の遠征よりベトナム資源・環境省、地質鉱産総局の許可を得て、ベトナム・日本国交樹立40周年記念事業としてベトナム国立地質博物館との共同研究調査と洞窟測量が認められました。また、同地区の人民委員会の協力も得て本格的な調査を行うことになり、ベトナムの発展に寄与できればと願っております。

今日まで当学会の運営、研究等は全て各会員の個人負担によるボランティアで行ってまいりましたが、ベトナム中部高原洞窟群は世界的に誇れる巨大溶岩洞窟群であることなどから、私達の力だけでは測量等の時間を要する作業は困難を極め、現地住民の方々の協力が必要となってまいりました。よって、現地の交通費や協力費、測量機材の購入、国際火山洞窟学会への登録及び報告書の出版費等のご支援、ご協力をお願いする次第であります。

何卒、この趣旨にご賛同いただきまして、格別のご支援、ご協賛を賜りますよう重ねてお願い申し上げます。 謹白

記

目標額 計 3,000,000-円 (1口 20,000円)

【協賛金使用内容】

調査報告書作成費（編集出版費）・現地通訳助手費・測量機材購入費
洞窟捜査現地案内人件費・学術調査員派遣交通費・サンプル分析依頼費
洞窟測量指導員派遣交通費・装備品輸送費・洞窟測量現地助手費
洞窟調査装備費・探検装備品費（現地参加者支給装備）・現地移動運搬交通費
洞窟内ビバーク装備食料費・その他通信運搬費等

ゆうちょ銀行 店名〇一九（ゼロイチキョウ）店 店番 019 当座預金 0578309
特定非営利活動法人 火山洞窟学会

2014年4月

特定非営利活動法人 火山洞窟学会
ベトナム火山洞窟調査プロジェクト
協力：ベトナム資源・環境省 地質鉱産総局
共同調査：ベトナム国立地質博物館

【事務局】特定非営利活動法人 火山洞窟学会
〒112-0012 東京都文京区大塚 3-6-1
TEL03-3941-4773（サカエプリント社着付）
会長 立原 弘

2014 年調査報告 速報

2014 年の正月休暇を利用し、11 名の日本・ベトナム火山洞窟合同調査は中部高原地下洞窟で新年を迎えました。

私たちは 7 年前の 2007 年に中部高原で火山洞窟が発見されて以来、2 回の下見と 1 回の予備調査を経て調査の基本となる洞窟測量を実施し、現在まで発見されている洞窟 10 箇所のうち 4 箇所の簡易洞窟測量を完了しました。

噴火口からは大量の溶岩を流出し、枝分かれしたと思われますが、その中でもドライサップ滝方向へ流れた仮称ドライサップ溶岩流中には巨大溶岩洞窟が形成され、頭記号 C を中心に測量を致しました。

洞窟内キャンプをしながらの探検調査中、世界三大毒蛇とも呼ばれる猛毒の蛇や日本には存在しない昆虫などの珍しい発見もあり、様々な分野での今後の調査報告が待たれます。



↑写真は美しい夕日の高原ですが、噴火口に近く、溶岩が滞留した平らな地域で現在は草原になっています。この広い台地の地下に無数の洞窟が存在しているのは驚きです。(撮影・立原弘)



↑洞窟内で発見された蛇で、後に判明した種類はコブラ科アマガサという猛毒の蛇とわかり青くなりました。(撮影・吉田勝次)

ベトナム火山洞窟調査プロジェクト



↑ C 7 洞窟の開口部。

唯一の開口部は堅穴であるため、ロープを使用して下降・登高し、調査・測量を行いました。（撮影・鈴木一年）



↑ C 7 洞窟の内部。

円形が見事で、側壁に溶岩の流れを示すラインが鮮明に残されています。（撮影・鈴木一年）



↑ 同封平面図（R 1 洞窟）の側壁の一部。

高温の溶岩が側壁を破って洞窟内に流れ込んだ場合と、天井剥離の場合も考えられます。

いずれにしても幾つかの条件がないとこのような滑らかな表面をした形状は出来ません。（撮影・立原弘）



↑ 匍匐するベトナムの女性調査員の前方には、床面流動の痕跡を観察することができます。（撮影・近野由利子）

cross-sectional view is unfinished.

断面図 (未)

○この簡易洞窟図面は、レーザー測定器を使用しております。
初期測量は磁気溶岩の障害があったりして誤差も生じるので
簡易測量としています。
図面「A1」は噴火口から近い溶岩滞留地の地下に形成され
た洞窟の一本ですが複雑な空洞を形成し、その数は無数とし
か答えようがありません。

MN

ground
plan

entrance

A1 (438.7m)
Scale: 1/500
2014/1
NPO法人火山洞窟学会
S: Yoshida, Chikano, Bien
M: Kizaki, Miyashita, Miyazaki, Shiokawa